

タイガー大越

パークリー音楽院に日本人初の教授誕生！

タイガー 大越

Q. 昨年、秋、ボストンの名門パークリー音楽院で日本人初の教授に就任されましたね。

なんとなく成り行きでなってしまったんです。これまでずっと流れに乗って自然にやってきたので、これも自分の生き方に合っているような気がします。

これが5年前だったら、教えるのは最後の最後にとっておこうと思ったでしょうが、10年20年と毎年旅を続けてきて、ちょうどいろいろなことを考え直す時期にきていたんですね。すごくいいタイミングのおファーでした。今のところは週2〜3回の個人レッスンだけにして、まだ旅に出られる可能性をとっておきたいですね。5年ぐらいでいい先生になればいいなあと思っています。

Q. 1972年に新婚旅行でボストンに立ち寄り、そのまま定住してしまわれたそうですね。その後の25年をふり返っていかがですか。

なにしろ新婚旅行で始まったわけですから、無からの出発ですよ。山を登りはじめて思ったのは、この山はどういう山かということ、誰かに聞いておきたかったということです。登りはじめて、靴が合わないと思ったり、地図がないわけだから、いつのまにか道がなくなっていたり。しょうがないから自分で道を作っている、ただただ登り続けて、頂上まできてやっと過去をふり返ることができるんですね。時間はかかったけれど、小説にたとえば第1章、第2章と展開があって、起承転結もあって、それぞれの章でこれはもうやらない、これはやる、と決心してやってきたのがよかったのかもしれない。やっぱり目的をもってやらないと見えるものも見えてこないし、やってみて合わなかったら目的をばっと変えてもいいんじゃないですか。

Q. 現在も世界中で演奏されていますが、国によって聴衆のレスポンスはどうですか。

国によって音楽の性質も違うし、うけるものも違うのは当然ですが、僕は音楽家として自分の信じている音楽の聴衆を一生かけて捜し回る努力をしなければと思っています。今のミュー

ジシャンには自宅でCDを作って売ればいくらの感覚の人もいますが、僕は僕の音楽を求めている人たちを自分で見つけていきたいですね。

今、音楽の歴史の長いヨーロッパがおもしろいと思っています。絵画は画家に、音楽は音楽家にまかせておけばどんどん伸びるものを、日本などではいろんなメディアやレコード会社が入ってきて、それでは売れない、今売れているのはこれだと口をはさんで若いミュージシャンを困惑させてしまう。彼らの音楽に対する愛すらも、余分なカラーで塗り込めてしまう。それがまだないのがヨーロッパなんですね。マスコミの評判で音楽を聴きに行くというのではなく、音楽家がやりたいことを聴きに行く。ヨーロッパではそれが可能なので非常に興味があります。

Q. タイガーの音楽をジャズと言わせてもらえば、今後世界のジャズはどこに向かっていくのでしょうか。

ジャズの巨匠というのがいますね。ジョン・コルトレインとかチャーリー・パーカーとか。もしそういう人が生き返ってきたら、みんなそっちにいて、今の若いミュージシャンなんかみんな忘れられてしまう。今やっている人たちは何かシャドーとして利用されているようなところがあるけれど、僕は、タイガーは自分のことをやっているからやっぱりタイガーのところに行かなくちゃ、と思わせたいんですね。

クラシックはクラシックで素晴らしいと思います。何百年も昔にかかれたメロディーが今でもやはりすごい。でも、ジャズはもう少し今を反映していった方がいいんじゃないですか。聴衆にそれを受け入れる態勢ができていようかどうかは問題ですが、僕の考えているような方向にジャズが伸びていけばいいなと思っています。

Q. 音楽を離れたときにはどんなことをされているのですか。

何にでも興味をもつようになってきました。水泳もやるし、ボディービルが好きだからジムにも通うし、ゴルフもはじめたし、この前はハワイでシュノーケルもやりました。フィギュアスケートのレッスンも受けてみたし。おもしろい



兵庫県芦屋のタイガー大越宅にて

タイガー大越（トランペット奏者）：写真右

1950年芦屋市生まれ。11歳でトランペットを手にし、独学で奏法をマスター。関西学院大学時代は軽音楽部に所属。72年大学卒業と同時に結婚、新婚旅行で立ち寄ったボストンにそのまま定住し、パークリー音楽院に入学。主席で卒業後同学院の講師に抜擢される。76年講師を辞め、恩師デイリー・パートンらと共にツアーで世界を回る。同年、自分のバンド「タイガーズ・バグ」を結成。

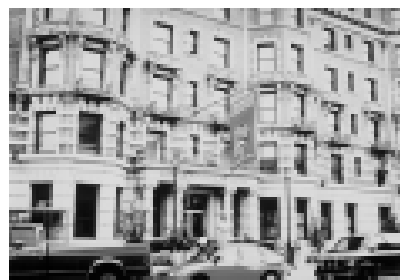
89年発表の「フェイス・トゥ・フェイス」が大ヒット、91年にはJTキャピルのコマーシャルをMALTAから引き継ぎ、軽快なリズムが全国に流れた。その後もアメリカを代表するジャズ・ミュージシャンと共演。97年9月には、母校であるパークリー音楽院に日本人初の教授として迎えられ現在に至る。米国ボストン在住。タイガー大越の名前は寅年生まれから。

から何でも挑戦して、何でもエンジョイできるんですね。

今までの自分は話題が少なかったような気がしています。音楽のことしか知らなかった。昔は海を見ているときも音楽のことを考えていたが、今は海を見ているときは海を見ている。本当にきれいな光とか、色の深さとかを、じーっとしてただ自分の中に浸透させていきたいなと思います。美しいもの、大きなもの、悲しいもの、厳しいものなどをしっかり自分で見ていけば、ビュアな音が聴こえてきて、ジャズの理論から離れてもっと人間的な音楽ができるんじゃないかと思っています。

Q. これからやってみたいことを一言。

プレーヤーとしての夢は、トランペット一本でステージをやることですね。大きなコンサートじゃなくて、客といろいろ話して、曲を吹いて、また話をして、といった感じで。トランペットはこんな曲ができるんやという、ただのジャズだけでない音の世界をクリエイティブしてみたいですね。



パークリー音楽院（マサチューセッツ州ボストン）